



HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	熊野地方・古座川流域最奥部の平井集落に伝わる屋号
Author(s)	揚妻, 直樹; 小西, 富美代
Citation	北海道大学演習林研究報告, 71(1), 39-46
Issue Date	2019-05
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/74735
Type	departmental bulletin paper
File Information	RBHUF71_3.pdf



熊野地方・古座川流域最奥部の平井集落に伝わる屋号

揚妻 直樹^{1*}, 小西 富美代²

House names in the Hirai Village in the Kumano Region, Japan.

by

AGETSUMA Naoki^{1*}, KONISHI Fumiyo²

要 旨

屋号は集落の歴史、過去における人々の暮らしや社会、そして生活環境を知る手がかりとなる。南紀熊野地方の山村集落における社会状況に関する情報収集の一環として、集落に伝わる屋号の調査を行った。調査地は、和歌山県・古座川流域の最奥部に位置する平井集落（古座川町）である。主に 2014 年から 2016 年にかけて、この集落に伝わる屋号を住民から聞き取った。その結果、平井集落では少なくとも 37 の屋号が伝わっていることがわかった。それらの屋号の由来は、主に立地由来、生業由来、社会関係（本家分家など）由来に分けることができた。屋号は親戚関係がなくても、家屋を譲り受けた方が受け継いでいた場合もあった。一方、文字記録に残っていても、所在が不明となっていた屋号もあった。平井集落を含め、古座川流域では人口減少が進んでおり、屋号や過去の生活状況に関する知識や情報が失われつつある。これらを早急に調査し、記録を後世に残しておく必要があるだろう。

キーワード：落ち武者、暮らし、社会、生業、分家、歴史

2018 年 12 月 28 日受付, Received December 28, 2018

2019 年 3 月 29 日受理, Accepted March 29, 2019

1. 北海道大学・北方生物圏フィールド科学センター・森林圏ステーション・苫小牧研究林

053-0035 北海道苫小牧市高丘

Tomakomai Experimental Forest, Forest Research Station, Field Science Center for Northern Biosphere, Hokkaido University

Takaoka, Tomakomai, Hokkaido 053-0035 Japan

*agetsuma@fsc.hokudai.ac.jp

2. 北海道大学・北方生物圏フィールド科学センター・森林圏ステーション・和歌山研究林

Wakayama Experimental Forest, Forest Research Station, Field Science Center for Northern Biosphere, Hokkaido University

はじめに

小集落内では家々を呼ぶ場合に姓を使わず、通称すなわち屋号（家号・家名・屋敷名）を用いることが多いとされている（岡野 1998）。その一因として、古い集落では同姓の家が多いことが挙げられる（岡野 1975; 羽島・葉袋 2014 など）。こうした屋号は住民の減少や転入・転出により、次第に使われなくなりつつあるという（越智 2009）。屋号は集落の歴史、過去における人々の暮らしや社会、生活環境を知る上で重要な手がかりとなる（東北歴史博物館 2008; 羽島・葉袋 2014）。特に、自然災害や火災などで集落に関する文物が失われている場合、人々の記憶に残されている屋号を含めた伝承が、過去の集落の状況を知るための貴重な情報源となる。こうした観点から、全国各地で屋号を手掛かりとした集落の研究が行なわれてきた（岡野 1982; 1998; 越智 2009; 東北歴史博物館 2008; 羽島・葉袋 2014 など）。しかし、急速に進行する過疎化に伴って、集落に伝わる伝承が失われていく可能性が高い。今のうちに記録に留め、後世に残しておくことが肝要である。本研究の目的は熊野地方、古座川流域の平井集落に伝わる屋号について記録を残し、将来の集落研究に役立てられるようにすることである。

調査地

調査地は紀伊半島南部、古座川流域の最奥部に位置する和歌山県古座川町の平井集落である（図 1; 図 2）。この集落は急峻な山々に囲まれており、平地が非常に少ない。そのため、人々は古座川の支流である平井川沿いの斜面に家や農地を開いてきた。

この集落の歴史を知る手がかりとなる文書類は焼失（「当村御本尊仏師折り紙焼失の覚書」）などによりほとんど残っておらず、文字情報をたよりに確認することは困難である（古座川町史編纂委員会 2005）。平井集落は壇ノ浦の戦い（1185 年）のあとで平家の落人が開いたという説があり（七川中学校 1999）、そのように伝え聞いてきた住民もいる。しかし、神社誌編集委員会（2010）が記載している添野川集落（平井集落の南西約 3 km : 図 1）の若宮神社に関する由緒書きには、承久の乱（1221 年）に敗れた村上源氏の流れをくむ村上清重が落ちのびて西川集落（平井集落の東約 2 km）を拓き、その後、分家が西氏として平井に移ったとある。一方、平井集落にある若宮八幡神社の由緒書きでは、1253 年に佐々木源氏の佐々木長左衛門（後の西長左衛門）が平井を開いたとしている（神社誌編集委員会 2010）。西氏に関する文書で

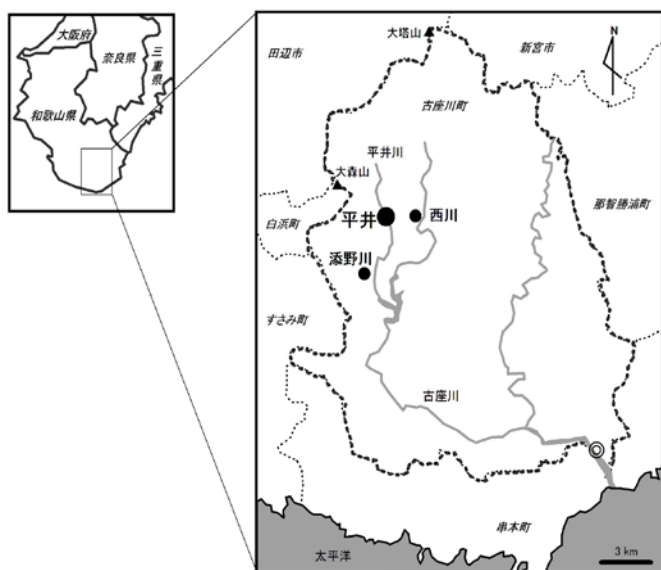


図 1. 平井集落および周辺集落の位置。

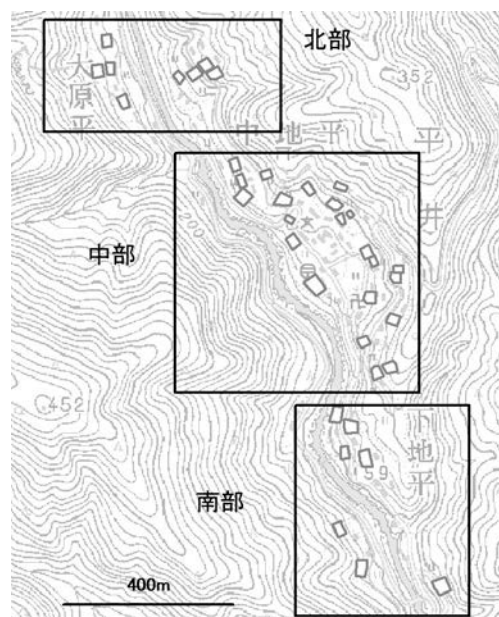


図 2. 平井集落全体図。地図は国土地理院の数値地図を使用した。白抜き灰色枠線は屋号が判明した家。

も、西氏は佐々木源氏の末裔としている（奥平 1841a）。平井集落には、西氏がかつて佐々木と名乗っていたことを伝え聞いている方もいるようで、この記述を裏付けている。また、一般に八幡神社は源氏が信仰してきた神社とされていることから、平井集落の開祖は源氏系の落人であるように推察される。西氏が平井を開いた後、前田覚右門の一家（当初は姓を「前」と名乗っていた）が 1395 年にこの集落に落ちてきたとされる（奥平 1841b; 七川中学校 1999）。ただし、平井集落の住人の中には前田氏の方が先に平井に住みはじめた考える方もいる。いずれにせよ、西氏と前田氏が平井集落の開祖筋であることは間違いなさそうだ。

紀伊続風土記には 1839 年の平井集落の人口は 40 戸 184 人とあり、1900 年頃までは 240 人前後（檜垣 1993）とあまり変化がなかったようだ。その後、明治時代の終わり頃から、林業と製炭業により人口が増えた（根本 1988）。それは大阪の木材業者・津田寛蔵が平井集落に製板所（製材工場）を開設していた時期（1900 年から 1921 年頃まで）に一致している（檜垣 1993）。1930 年頃の平井集落の人口は 315 人程度と見積もられる（63 戸、1 戸平均 5 人：北海道帝国大学農学部付属演習林 1932）。戦後、復員などにより人口が増え（湊ほか 1984）、1948 年には 474 人、1960 年でも 456 人と（檜垣 1993）、4～500 人を維持していた。それ以降は人口が減り始め、1980 年に 326 人（檜垣 1993）、1990 年で 238 人、2000 年で 180 人（古座川町 2005）となった。2012 年の居住者数は 116 人、高齢化率は 86% に達しており（湯崎ほか 2013）、平井集落は限界集落に位置づけられよう。現在の主な生業はユズ生産などの農業、ユズ等の食品加工および販売業、北海道大学和歌山研究林職員などである。

調査方法

2014 年 3 月から 2016 年 9 月まで数回に渡って、50 歳代から 90 歳代（聞き取り時の年齢）の平井集落の住民 8 名から聞き取りを行い、情報を提供して頂いた（内 1 名は著者である小西）。さらに、2018 年と 2019 年に追加の聞き取りを住民に行った。この間、複数回の聞き取りに協力して頂いた方もいる。聞き取りの際には原則として、情

報提供者に住宅地図（ゼンリン株式会社 1997）を提示し、屋号を持っている家の位置とその由来、いつごろからその屋号が使われるようになったかを、わかる範囲で伺った。また、戦後しばらくまでの時点で集落内にあった商店・施設等についても、過去の暮らしを知る上で重要と考え、それらの位置も教えて頂いた。なお、それらには調査時に現存していたものもある。収集した情報は地理情報システム（ArcGIS ver 9.3, ESRI 社）に入力し、国土地理院の電子地図に重ね合わせて、聞き取り情報と共に集約した。

聞き取り調査に加えて、前田武ヨ門氏がまとめた前田家近世（姻戚）系譜図、西家と前田家に関する文書（奥平 1841a:b）、古座川町公民館平井支部の機関紙「辛夷」などの文献調査も行った。

結果と考察

聞き取り調査により平井集落の 37 の屋号とその位置を記録することができた（表 1：便宜的に屋号に番号をふった）。それらの屋号は現在でも使われることがあるそうだ。屋号を持っている家および神社や寺院・商店など、過去の主要な施設の位置を図 3～5 にまとめた。なお、屋号を持った家や施設が移転していた場合は、過去の集落の状況を反映できるように移転前の位置を示した。

平井集落の屋号が使われ始めた時期は定かでないが、少なくとも情報提供者らの祖母・祖父の世代では使われていたことから、明治期までは遡れる。中世から近世に移り、日本の社会制度が大きく変わったことで、屋号（家号）のつけられ方が変化したとの指摘がある（岡村 2006）。平井集落でも、明治期以降に付けられた屋号が多いのかもしれない。ただし、奥平（1841a）には、天和年間（1681-1684）に「弓場（お弓引き行事で矢を射る場所）」という場所や、「大屋敷」という家名が記されている。弓場がある以上、的場もあったはずである。その後、時代は不明だが、平井集落に古くからある井戸の近くに新たに建てた家の家名を「新屋」としたとある。今回の調査では「新屋」については情報を得られなかったが、「16 弓場（ユバ）」「17 的場（マツバ）」「26 大屋敷（オヤシキ）」（表 1; 図 3）については江戸期以前まで遡れる可能性がある。

表 1. 和歌山県古座川町・平井集落に伝わる屋号

番号	屋号（読み）	屋号（漢字）	由来タイプ	由来	備考
1	カミ	上	立地状況	川の一番上流にあるから。	
2	ムカエ	向え	立地状況	川の向かい側にあるから。	
3	ウエ	上	立地状況	斜面の上のほうにあるから。	
4	オハラ	大原	立地状況	大原平に最初に移り住んだから。	
5	インキョ	隠居	社会関係	本家の分家だからか？	
6	ホンヤ	本家	社会関係	上地平に最初に移り住んだから。	
7	シモノインキョ	下の隠居	立地状況	隠居の下手にあるから。	
8	サンキョ	さん居	社会関係	分家の分家だから。	三居かも知れない。
9	イセヤシキ		不明		
10	トウフヤ	豆腐屋	生業	豆腐を作っていた。	
11	イシヤ	石屋	生業	墓石や石塔を作っていた。	
12	オサキ	尾先	立地状況	尾根の先にあるから。	
13	ハシタニ		立地状況	谷の端にある。	
14	クシ	串	立地状況	クシノミネという地名からついた。	久志と書く可能性あり。
15	ウワジ	上地	立地状況	平井の一番上だから	
16	ユバ	弓場	立地状況	お弓引き行事の際に弓を射る場所。	
17	マツバ	的場	立地状況	お弓引き行事の際に的を置く場所。	
18	シンタク	新宅	その他	恐らく、新築されたため。	85年前には既に古い家屋だった。
19	タタミヤ	畳屋	生業	畳屋をしていた。	
20	マルタ	丸田	立地状況	丸い田があった。	既に移転している。
21	マエ	前	その他	前田家本家。かつて前と名乗っていた。	既に移転している。
22	ネキ	根城	不明		
23	キタ	北	立地状況	東西南北の北か。	
24	サコブラ	碓ぶら	立地状況	さこ（碓）の裏だから。	
25	ヒガシ	東	立地状況	平井の東側だから。	
26	オヤシキ	大屋敷	その他		
27	ナカイッキョ	中隠居	社会関係		
28	ミズシリ	水尻	立地状況	農業用水の最後（お尻）の部分。	
29	ミナミ	南	立地状況		
30	カワラヤ	瓦屋	生業	130-140年前、瓦を焼いていた。	
31	カジヤ	鍛冶屋	生業	鍛冶屋をしていた。	
32	シモガイト	下垣内	不明		
33	クボイッキョ	久保隠居	社会関係		
34	シントニ		その他	シントニ本家が住んでいた。	既に集落から転出している。
35	イッキョ	隠居	社会関係		
36	ウケゼ		立地状況？	集落内に受瀬平という地名あり。	立地場所は現在の受瀬平ではない。
37	タケノヘラ	竹の平	立地状況	大きな竹林があった。	

屋号の由来については、立地の状況、生業、そして本家分家などの社会関係が元になってつけられることが多いようだ（岡野 1998; 越智 2009）。平井集落においても、多くはこれに当てはまっていた。ただし、由来が良く解らない屋号もいくつかあった。

立地由来の屋号としては、先述の 16 弓場（ユバ）・17 的場（マツバ）のほか、24 碓ぶら（サコブラ：谷のうらがわ）、28 水尻（ミズシリ：農業用

水の終わりの部分）（図 4）、37 竹の平（タケノヘラ：竹林があった）（図 5）などがある。また、26 大屋敷（オヤシキ）から見て、東方に 25 東（ヒガシ）、23 北方に北（キタ）、29 南方に南（ミナミ）の屋号が配置されている（図 4）。なお、西方には西氏の家がある（図 4 には不記載）。このことは 26 大屋敷（オヤシキ）が集落の中心的な位置にあったことを示唆している。

生業由来の屋号には、10 豆腐屋（トウフヤ：

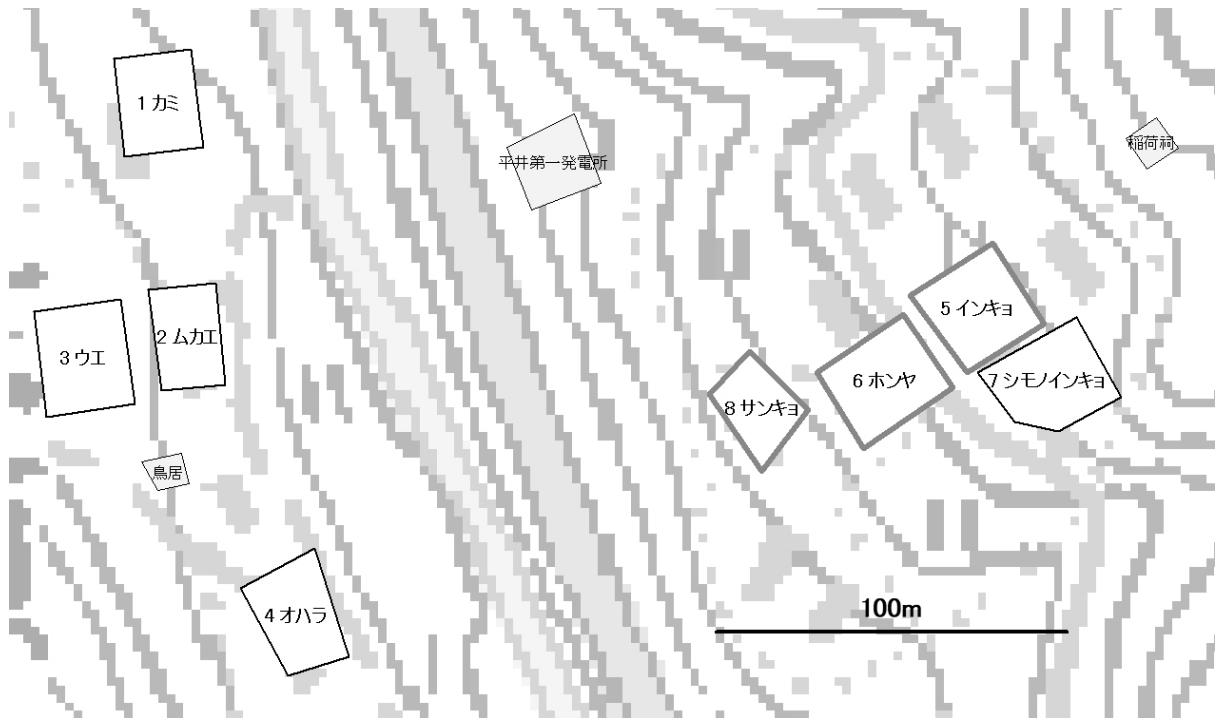


図 3. 平井集落北部の過去の主要施設（灰色塗りつぶし）と屋号の位置（白抜き）。細黒枠線は立地状況由来、中太灰枠線は社会関係由来の屋号。

豆腐職人）、11 石屋（イシヤ：石工職人）、19 畳屋（タタミヤ：畳職人）、30 瓦屋（カワラヤ：瓦焼き職人）（図 4）、31 鍛冶屋（カジヤ：鍛冶職人）（図 5）がある（表 1）。これらは、かつての集落の産業や暮らしぶりを知る手掛かりにできそうだ。

本家分家関係に由来する屋号もあった。平井集落では分家を「隠居」と呼んでおり、この隠居に関連する屋号が 6 つ認められた。平井集落では、同じ隠居という言葉を用いた屋号でも、読み方を 5 インキョと 35 イッキョに読み変えたり、27 中隠居（ナカイッキョ）というように言葉を付け加えたりして区別している（表 1）。なお、8 さん居（サンキョ）は分家の分家という意味とのことだ。ただし、7 下の隠居（シモノインキョ）は分家筋ではなく、5 隠居（インキョ）の家の下手に家があったためつけられたもので（図 3）、場所由来の屋号である。

屋号は血縁や親戚関係を通じて、受け渡されていくことが多いと考えられるが、家主がかわっても家屋自体に受け継がれる場合もあるようだ。

大正時代の終わり頃、26 大屋敷（オヤシキ）の屋号を持っていた方がブラジル移住のため、家屋・田畑を平井集落の外から移住してきた他家に売却したが（「平井の里を拓いた落ち武者たち」；「前田家近世（姻戚）系譜図」など）、購入した方は家屋と共に屋号も譲り受けることになったそうだ。

また、18 新宅（シンタク）は新しく建てた家という意味のようだが（しかし、85 年以上前の時点で既に古い家屋だった）、その元の屋号は「ヤオチ」だったとある（古座川町公民館平井支部こぶし会 1978）。17 的場（マツバ）の下の場所なので（図 4）、”矢落ち”などと矢と関係がある屋号なのかもしれない。これは屋号が状況によって変わった事例と言えそうだ。

一方で、22 根城（ネキ）や 32 下垣内（シモガイト）など由来の解らない屋号もあった（表 1）。9 イセヤシキの由来も不明であるが、前田家近世（姻戚）系譜図には通称「イシャシキ（医者屋敷か）」と呼ばれていた家があったと記されている。この通称が変化してイセヤシキになったのかもしれない。

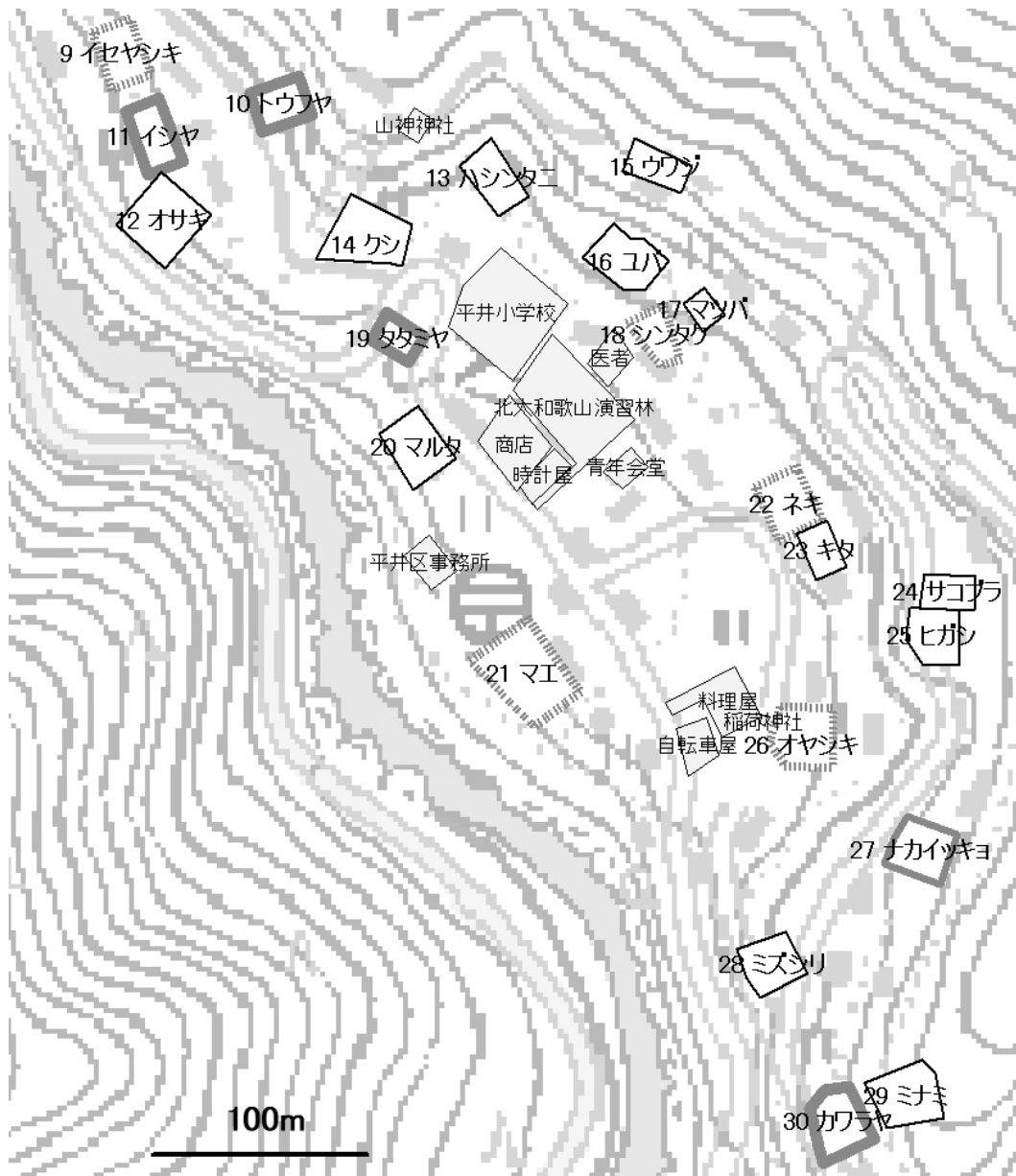


図4 平井集落中部の過去の主要施設（灰色塗りつぶし）と屋号の位置（白抜き）。細黒枠線は立地状況由来、中太灰枠線は社会関係由来、太灰枠線は生業関係由来、点線はその他・由来不明の屋号。

れない。その場合は、この屋号は生業由来ということになる。なお、前田家近世（姻戚）系譜図には「富屋」という屋号が載っているが、聞き取り調査では、この屋号のことを知っている方はいなかった。

今回の調査により、平井集落の屋号について、ある程度を記録に残すことができた。しかしなが

ら、その由来や使われ始めた時期などの情報は十分には収集できなかった。人口減少が急速に進む中、より詳細な調査を行い、記録していくことが重要である。さらに、近隣にある多くの集落、特に平井集落のような流域の奥地に立地する小集落を対象に、屋号や過去の生活状況に関する調査を行う必要がある。

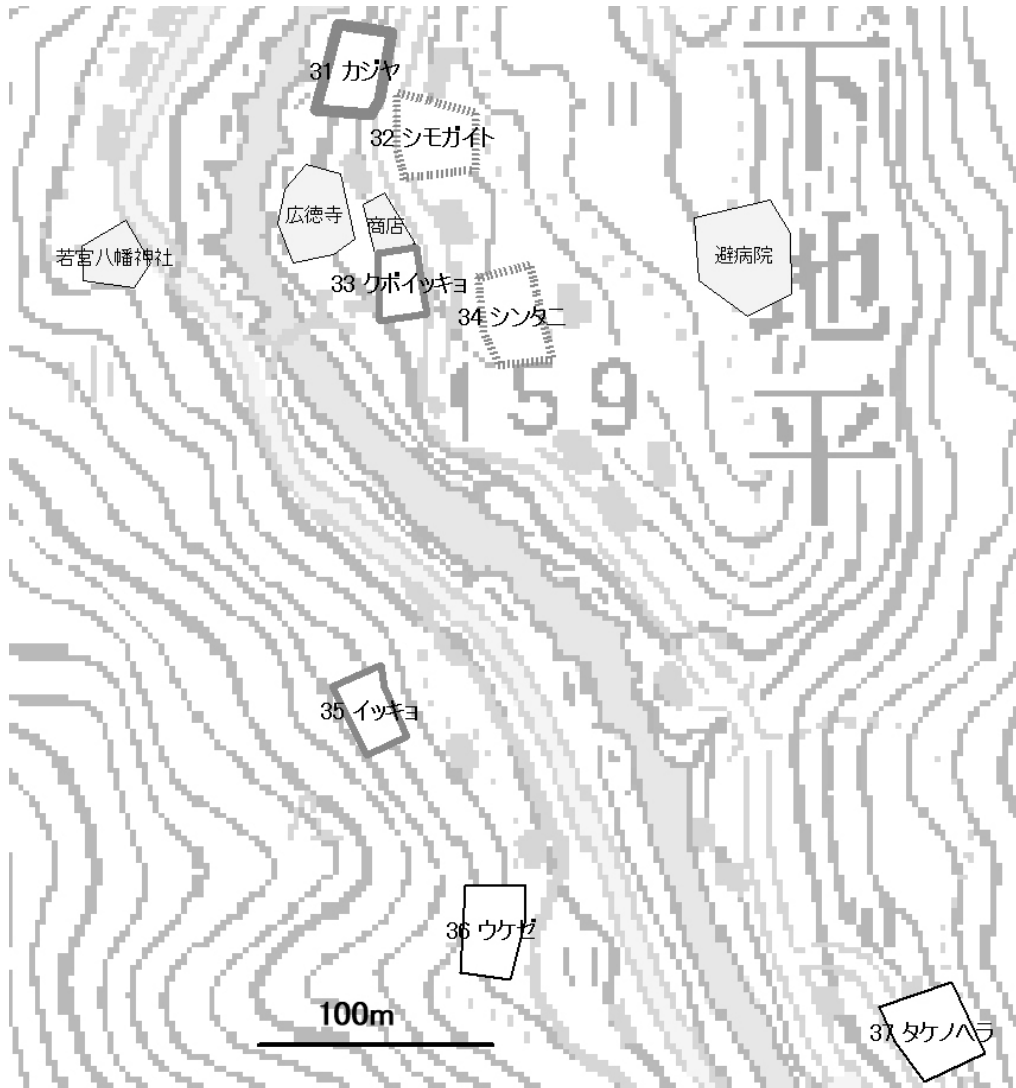


図 5. 平井集落南部の過去の主要施設（灰色塗りつぶし）と屋号の位置（白抜き）。凡例は図 4 と同じ。

謝辞

聞き取り調査を行うにあたっては古座川町・平井集落の皆さんには大変お世話になりました。特に詳しい情報を教えて下さった（順不同）前田卓治氏・前田香球代氏・寺本守氏・寺本のり子氏・前田久枝氏・松林秀起氏・羽山勤氏・前田英之介氏には御礼申しあげます。今回の聞き取り調査の一部は北海道大学和歌山研究林の施設を利用して行った。本研究は和歌山研究林設置 90 周年記念事業の一環として実施した。

引用文献

- 羽島愛奈・薬袋奈美子（2014）漁村集落における生活行為と集落空間の利用－宮城県女川町竹浦集落を事例として－. 日本女子大学紀要 家政学部 61:73-80.
- 檜垣 巧 編（1993）古座町・古座川町調査報告書. 高野山大学社会学研究室・財団法人和歌山社会経済研究所, 高野町, 132pp.
- 北海道帝国大学農学部附属演習林（1932）北海道帝国大学農学部附属和歌山演習林概要, 札幌市, 50pp.

- 古座川町 (2005) 第4次古座川町第4次長期総合計画 (2005～2014. 古座川町, 82pp.
- 古座川町公民館平井支部こぶし会 (1978) 年輪 4 郷土の大先輩に聞く. 辛夷 10: 2-8.
- 古座川町史編纂委員会 (2005) 古座川町史近世資料編. 古座川町, 909pp.
- 湊 克之・成田雅美・山之内誠 編 (1984) 北海道大学和歌山演習林長期計画(1984年～93年). 演習林業務資料 18: 1-34.
- 根本昌彦 (1988) 山村経済と共同体的所有林野－和歌山県古座川町平井における旧入会林野の戦後過程－, 北海道大学農学研究科修士論文, 札幌, 114pp.
- 越智正樹 (2009) 八重山戦後開拓集落と母村との間の親族間交流の変容. 京都大学グローバルCOE「親密圏と公共圏の再編成をめざすアジア拠点」. GCOE ワーキングペーパー次世代研究 8: 1-21.
- 岡村光展 (2006) 保有地の復原から考察する歴史時代における散居村落・小村落の成立と構造－胆沢扇状地の事例 (2)－. 新潟大学教育人間科学部紀要 8: 157-170.
- 岡野信子 (1975) 山陰西海諸島の家称語彙. 日本文学研究 11: 123-136.
- 岡野信子 (1982) 屋号語彙研究ノート. 日本文学研究 18: 189-200.
- 岡野信子 (1998) 家号語彙研究の構想. 日本文学研究 33: 177-190.
- 七川中学校 (1999) 七川の史話・伝説. 古座川町, 10pp.
- 奥平佐平 (1841a) 当村元祖「西」家代々に拘わる書き写. 天保十二年 いち松. 古座川町, 1p.
- 奥平佐平 (1841b) 前田本家の覚え書き. 筆者 与五兵. 天保十二年丑の年の春 (一八四一) 春書き写す. 古座川町, 2p.
- 東北歴史博物館 (2008) 波伝谷の民族－宮城県南三陸沿岸の村落における暮らしの諸相－. 多賀城市, 195pp.
- 神社誌編集委員会 (2010) 新編 和歌山県神社誌. 和歌山県神社庁, 和歌山市, 509pp.
- 湯崎真梨子・揚妻直樹・塚田晃司・中島敦司 (2013) 災害時孤立集落の「不安」と「安心」の要因・台風 12 号における高齢山村、平井区の事例. 日本地域政策研究 11: 53-62.
- ゼンリン株式会社 (1997) ゼンリン住宅地図 古座川町. ゼンリン株式会社, 北九州市, 36pp.

Summary

Hirai Village was developed in the Kozagawa Basin in Japan's Kumano Region by the tribes of fleeing soldiers during the 13th century. We asked mainly eight local residents about house names in the village between 2014 and 2016, and could record 37 house names. These house names have been classified into three main originations: location, house branch, and occupation. However, the use of these names is gradually ceasing. It is therefore necessary to gather much information about these house names to better understand life in the past and the history of Hirai Village.

Key words: fleeing soldiers, history, house branch, local society, village life